ヴォーリズ夫妻の教育思想と「近江ミッション」教育事業の展開

奥村直彦

はじめに

本研究は、筆者によるヴォーリズと近江ミッションについての継続的研究の一部であり、特にヴォーリズ夫妻における教育思想の形成過程と、その教育観に基づく近江ミッションの教育事業の展開について明らかにすることを目的としている。

研究領域としては、夫妻の生い立ちから、彼らの教育観の形成に至る時期、即ち、およそ一八八〇年代から一九一〇年代まで、および夫妻の結婚後間もなく夫人満喜子が教育事業を開始した一九二〇年代から、戦後、それまでの近江ミッションの教育事業を統合して、「学校法人近江兄弟社学園」が設立された一九五〇年代初めまでの、前後約七十年間に亘ることになる。しかしその期間をすべて網羅する訳ではなく、夫妻の教育思想とその形成に関わる諸要因、並びに近江ミッションが教育事業を起こし展開する過程を考察して、ミッションの教育事業の全体像と、その意味を把握しようとするものである。

ヴォーリズ夫妻の教育思想に関する直接的な先行研究としては、佐野安仁氏の「一柳満喜子の教育観」（「キリスト教社会問題研究」三〇号、一九八二）があるのみで、間接的には、後程紹介する通りの、基本的な研究資料、参考文献によることになる。

ヴォーリズ自身および近江ミッションの諸事業に関する学術的研究としては、建築関係を除いては、本稿の注に記載した筆者の諸論文があり、他に先行するものはない。[1] 建築に関するものとしては、山形政昭氏の「ウイリアム、メレル、ヴォーリズの建築をめぐる研究」（一九九三）を始め、「ヴォーリズの建築」（一九八九）その他多数の論稿があり、建築部を中心とした近江ミッションの構造解明と、それが手がけた各ミッションスクールの歴史等に触れている点が本研究にとって有益である。

本研究の参考資料としては、さきに述べたように、すでにおなじみとなった次の基本的文献がある。

一柳米来留「失敗者の自叙伝」（一九七〇初版）、吉田悦蔵「近江の兄弟」（一九二三初版）、沖野岩三郎「吉田悦蔵伝」（一九四四）、月刊「湖畔の声」、"A MUSTARD SEED IN JAPAN"（一九一一初版）、隔月刊"THE OMI MUSTARD-SEED"

内炭政三「一柳米来留（W・M・ヴォーリズ）の一生」（「湖畔の声」連載、一九七六―一九八四）、等。

この他特に教育に関する本研究では、一柳満喜子「教育随想」（一九六六年版）、「教育のこころみ―近江兄弟社学園五〇年小史」（一九七七）、「近江八幡基督教会略史」（一九二五）、「近江八幡教会七十五年史」（一九七五）等を用いた。

なおヴォーリズ夫妻の生涯については、G. N. Fletcher: "The Bridge of Love"（一九六七）は極めて有用な文献である。[2] またヴォーリズの生い立ちに関して、レヴンワース、フラッグスタッフ、デンヴァー各地で得た教会関係資料があるが、これらは別の機会に取り上げたい。コロラド大学時代については、「コロラド大学とヴォーリズ」（第四一回キリスト教史学会、一九九〇）を発表し、来日の経過と教師時代については、注記の関係論文[3]の他、「明治期における Association Teacher」（第四七回日本教育学会、一九八八）の発表がある。

後述する近江ミッションの教育事業の研究としては、拙論「大林子供の家」（第四二回日本教育社会学会一九九〇）、同「産業関連高等学校の課題」（第四一回日本教育社会学会、一九八九）等の発表、および拙稿「近江兄弟社高等学校定時制部四五年史」（一九七八）がある。

その他前掲注記の拙稿論文に使用した第一次史料、関係文書を本研究でも用いたことを付言しておきたい。

一　ヴォーリズの教育思想とその形成過程

(1) 生い立ち

人の思想は、その人の思惟の整序されたものであり、本人の素質を含む生い立ちと、学習、ならびに自然及び社会的環境などによって形成されるが、教育思想の場合は、往々にしてその人自身の受けた教育に左右されることが多いように思われる。[4] それが、もし第三者から見て問題の多い教育であっても、本人はそれも含めて、その教育を受容していることが多々あるからである。そこでヴォーリズ夫妻の場合、以下彼らがどのような素質を持ち、如何なる環境のもとで、どんな教育を受けて成育し、それが彼らの教育思想形成にどのように作用し、影響していったのかを考察してみたい。

まず、ヴォーリズ William Merrell Vories（一八八〇―一九六四）は、一八八〇年一〇月二八日、父ジョンヴォーリズ John Vories 母ジュリア Julia Eugenie の長男として、カンザス州レヴンワース Leavenworth 五番街一〇四四の、母方の祖父ウイリアムメリル William Merrill の家で生まれた。父方の先祖は一七世紀のオランダ系移

民の子孫、母方の祖先はイギリスからの移民であった。ヴォーリズはその自叙伝において「遺伝と環境とは、どんな人の生涯を研究するに当たっても、見のがしてはならないことである。われらは両親の子どもであり、先祖の子どもであり、時代の子どもであり、また神を信ずるならば、神の子どもである」[5]と述べている。

さらに、同じ自叙伝の次の言葉は、かれの幼少期の人格を形成した、従ってかれの生涯の教育観を決定づけた三つの要素について、深い示唆を与えるものと言える[6]。

「こうして、幼少時代に、私の心に深く入った最初の印象が、音楽、宗教、自然の三者であったことは、何としても幸福なことであった。」（「失敗者の自叙伝」一九八〇）

以下、これについて少し説明しておきたい。まず、宗教というのは、先祖伝来のピューリタニズムのキリスト教信仰のことであり、「特に生誕地、カンザス州レヴンワースにおいて、一家がカルヴァンの流れを汲む長老派の教会 Presbyterian Church に属する、敬虔な信仰者であったことが、かれの生涯の方向を決定したと言えよう。母方の祖父ウイリアムメリル（メレル）は、レヴンワース第一長老派教会の有力な長老であり、ヴォーリズの両親はその教会で知り合って結婚し、祖父の家に共に住み、ヴォーリズが生まれたのである。

長老派の信仰からヴォーリズが受け継いだのは、「神の執事」の思想であった。即ち、自分の生涯を含め、すべては神からの預託であり、これを神＝聖霊の導きに従って活用していくのが人間の正しい生き方である、そうすれば神は必ず私たちを正しく導き、養ってくださるという信仰である。これはヴォーリズの生涯を通じて変わらないモチーフとなったのである。彼はこれについて次のように述べている[7]。

「キリスト教の道徳を実行に移すということは、神の「執事」になるということです。……我々が持っているものは皆神からあ

づかったもので、我々は一時（我々の生きている間）あづかっているだけで、我々のものは皆神のものです。我々の生命も財産も、才能も時間も、仕事も皆神のもので、我々に一時あづけられたものでありますから、十分それを働かして、何時でも神が要求し給う時に、皆それをお返しせねば成らないのです。……」（「私はキリスト教をこう考える」『湖畔の声』二六五）

次に音楽については、病弱だった幼少時、従姉のカリーが弾くピアノの傍らで、何時間でも飽きずに聞き入っていて、そのモーツアルトやメンデルスゾーンの音楽が「骨の髄にまで浸透」したと、彼自身が述懐している。後に中学高校、そして大学でもオルガンを弾く機会が与えられ、また教会のオルガニストとしても、生涯奉仕した。音楽は彼の人格形成に大きな影響を与え、教育観の大切な要素となったと言えよう。

一八八六年、一家はアリゾナ州のフラッグスタッフ Flagstaff という高原の小さな町に移り住んだが、病弱だったヴォーリズの健康のためであった。彼はこの豊かな自然の中で、宗教心と詩心を育まれ、健康を回復した。彼は次のように回想している。(8)

「健康は確かに、北部アリゾナの風土が与えた貴重な賜物であった。また精神の高揚は、山や谷やココニノの森のおかげであり、夜の高原の清らかな大気、荘厳な空、言語に絶する早朝の曙光や薄明の日没から受けた印象であった」（「失敗者の自叙伝」）

すでにこれらの記述の中に、我々は彼の豊かな詩心と宗教性を見いだすことが出来る。こうして、宗教と音楽と自然とは、彼の生涯の導きとなった。なお絵も好きで、特別に先生について習いはじめたのもこの時代のことである。

一八九六年、一家は今度はコロラド州、デンヴァー Denver へ引っ越した。ヴォーリズと弟ジョンら子供たちの教育のためであったという。大都会であるデンヴァーでの高校時代に、ヴォーリズは様々なアルバイトで実社会の一端を知り、学校の音楽クラブに熱中した。また建築に興味を抱くようになり、建築現場を熱心に観察して飽きることがなかった。そして前記三要素に絵画が総合されて、建築家になりたいと考えるに至るのである。

(2) 大学生活と海外宣教への召命

一九〇〇年、ヴォーリズはデンヴァーの南、約一〇〇キロの小さな町、コロラドスプリングス Colorado Springs に所在するコロラド大学 Colorado College に入学した。建築家になるため、将来MITに進めるコースに入ったが、大学二年の時、海外宣教の道に導かれ、結局このコロラド大学を卒業することになる。彼の教育についての考えは、この大学時代に育まれたものと思われる。

ヴォーリズは、この敬虔でしかもリベラルなキリスト教主義大学で、学問の広さと深さを学び、課外に大学YMCAとSVM=Studennt Volunteer Movement for Foreign Mission に所属して、熱心な宣教活動を行っている。一方、彼の文学と詩への興味は、ピアソンズ文学会に所属して満たされた。

ここで、まさにヴォーリズの生涯を決定づけたコロラド大学YMCAと同SVMの活動はどのようなものであったのか、当時の資料によって検討してみたい。[9][10]（拙訳）

（一）コロラド大学YMCAは、
一、学内でのクリスチャンキャラクター Christian Character の発展とキリスト教の強化、拡張を図る
二、学内の助けを必要とするすべての学生を援助する
三、新入生の世話をし、ガイドブックを発行する。講演会、祈禱会等の学内集会を開催する
四、定期的な聖書研究会を持つ

（二）コロラド大学SVMは
一、将来の海外宣教のために、その働きに自分自身を適合させるように、そして自分だけでなく、他人に関心を持つことが出来るように、会員を助ける
二、人間の霊 Spirit、知（心）Mind、体 Body (Phisical) の発達は、生命の付与者 the Giver of life の目的に従って生き

ることによってのみ達成される

三、それは自分のためばかりでなく、人類のあらゆる階層と状況の中にいる人々の伝道に関わることなのである

これらを見る時、当時のアメリカにおけるキリスト教の勢いと、その一端を担うクリスチャン学生グループの純粋さには感心せざるを得ない。ヴォーリズは、ここに属して熱心に活動していたからこそ、一九〇二年、トロントで開かれた第四回SVM世界大会のコロラド州代表に選ばれ、神の召しを受けて来日するに至ったのである。

ここに見るSVMの思想には、さきに記したピューリタンの「神の執事」の信仰が生きており、それはヴォーリズの生涯と教育観の根底をなすものであった。だから彼は建築家になりたいという希望さえ神に捧げ、大学のコースも哲学科に変えて、海外宣教への召命に従ったのである。このヴォーリズの召命については本稿では触れない。[11]

(3) 滋賀県県立商業学校英語教師

一九〇五年(明治三八)二月二日、YMCAの仲介によるAssociation Teacherのルートから滋賀県県立商業学校英語教師として来任したヴォーリズは、英語の読み方、書き取り、作文、会話などを教え、放課後は下宿でバイブルクラスを開いた。また滋賀県立彦根中学校、同膳所中学校でも英語を教え、それぞれバイブルクラスを開いていた。これらは、来日に当たって「もし放課後に生徒が希望するなら、聖書を教えてもよい」という約定があったからであり、むしろこれまでの経緯からして、それが彼の来日の真の目的であったことは明らかである。[12]

その年の一〇月六日、ヴォーリズは、そのバイブルクラスに集まる生徒たちを中心に、京都YMCAフェルプス主事G.S.Phelpsの協力を得て、滋賀県県立商業学校基督教青年会=YMCAを結成した。これは公認のクラブ活動

であり、聖書を学び、祈りと純潔な生活を通して、霊知体の全人的な発達を図るＹＭＣＡの教育理念に基づくものであった。これによるヴォーリズの教育は、地方小都市の純真な青少年学生の間に受容され、校内によい感化を与えていった。しかし、翌明治三九年になると、たまたま発生した校内暴力事件をきっかけに、本願寺を中心とした仏教勢力によるヤソ教排斥の動きが強まり、それが校内のみならず、県議会や県学務関係者の一部にも及び始めたのである。

一九〇七年二月一〇日、ヴォーリズは兼ねてからの念願であった「八幡基督教青年会館」（ＹＭＣＡ会館）を自費と海外の寄付によって完成させ、その竣工式を盛大に行った。そして学生ＹＭＣＡ運動を広め、「キリストの精神を一般生活に適用する」という彼独自の理想を実現していくための拠点としたのである。[13]

しかし今後伝道活動を止めるなら講師契約を続けるとする当局者と、放課後のバイブルクラスは当初からの約束であるとして、当局の申し出を断ったヴォーリズとの間に立った仏教徒の伊香賀矢六校長は、ついに講師契約を更新しないという手段を用いて、ヴォーリズを解任したのである。その解職は「大多数が仏教徒である本県県民の意志により」[14]という当時でも無謀としか言いようのない理由によるものであった。ここには近代日本におけるキリスト教受容に関わる、前近代的な問題が含まれているが、本稿では省略する。[15]

（4） 教師としてのヴォーリズと教育観

カーゼルマンの「教師のタイプ」によれば、教師には「子供（児童）志向」型と「学問志向」型の二類型があり、さらに「同朋的」態度と「権威的」態度とに分類される。[16] ヴォーリズは明らかに「子供志向」型で「同朋的」態度の教師であった。それは明治末期のわが国では比較的少ないタイプであったし、生徒と年齢差のない若い外国人教師として、生徒と友達のように接したので、彼の下に多くの生徒が結集したのだと思われる。

ヴォーリズに教育思想や教育観があったかと言えば、先に述べたように、ピューリタニズムによる「神の執事」の人間観が根底にあり、ＹＭＣＡやＳＶＭの霊知体の全人的教育理想に立ち、それに向かって教育活動を行っていたと言えよう。しかし、当初は、その理想に基づいた学校をつくるところまでは考えていなかった。むしろ、「キリストの精神を一般生活に適用する」、つまり「神の国」の理想社会のヴィジョン実現に向かって、「近江ミッション」を結成し、県内各地に基督教青年会館を建設してＹＭＣＡ運動を展開することに主眼があった。そのための伝道活動と自らの建築設計業と、医薬品雑貨販売の会社を設立して伝道資金を得る働きに、多忙を極めていたのである。

もちろん、いかなるミッションも、後継者を育成する教育機関を必要とすることはヴォーリズにも分かっていたし、後述するように、そのヴィジョンも描いてはいたが、近江ミッションの教育事業の働きは、満喜子夫人との結婚まで待たなければならなかった。

なお、ずっと後になって、戦時中、ヴォーリズは東京と京都の両帝国大学、同志社大学で英語英文学の講師に招かれたが、大学生相手の講義でも、「子供（学生）志向」型で、同朋的態度の教師であったことが、学生の記録等から明らかにされている。[17]

二　一柳満喜子の教育思想とその形成過程

(1) 生い立ち

一柳満喜子（一八八四―一九六九）は、明治一七年三月一八日、旧小野藩主一柳末徳子爵の三女として、東京の芝

愛宕下佐久間町に生まれた。彼女の「教育随想」によれば、家庭は複雑で、妻妾同居のような状態の中で、母栄子は「三従の教え」に従う忍耐の生活を送った。しかし、栄子は、妾腹の長女の世話をするため、その長女が入寮していた長老派のミッションスクールへ出入りするうち、そこの学校から聖書を贈られて、大きな慰めと信仰を得た。そして明治一〇年一〇月、芝露月町の長老派教会で、グリーン博士 D. C. Greene（一八四三―一九一三）から受洗した。当時、華族が洗礼を受けるのは、珍しいことであった。後に牛込払方町の日本基督教会に転会している。[18]

父末徳は、慶応義塾に学び、ヘボンやフルベッキにも教えを受けて民主主義やキリスト教に賛成であったので、妻の受洗や教会行きには積極的に賛同したが、自分自身の生活を改めることはなかったようである。満喜子はそんな母に同情し、父を嫌悪したが、母は彼女が九才の時に世を去り、以後精神的に寂しい少女時代を過ごすことになる。

母栄子は、一八五三年生まれ、同じ一柳姓の他の大名家から嫁いできたが、自分の子四人と妾腹の子三人の面倒を見て、十二人の大家族を背負い、妾たちの教育までも担って、その苦労は並み大抵ではなかったと思われる。しかし入信後は、敵を愛せよとのキリスト教精神に立つと共に、教会関係の婦人会で、貧しい人たちへの奉仕活動にも参加していた。栄子は、家庭内で信仰について満喜子には何も語らず、黙って祈ることが多く、それが満喜子の生き方と信仰に無言の感化を与えたと思われる。[19]

満喜子も父の意向でミッション系の幼稚園に通い、東京女子高等師範学校の付属小学校から同高等女学校を卒業、さらに同校補修科も終了した。

彼女が十六才を過ぎた頃、父と家族は兵庫県の明石に移り、父は、常に何か目標を求めてやまない満喜子に、神戸女学校（神戸女学院）音楽部に入ることを許した。こうして満喜子は、当時のピアノ科ただ一人の第一回卒業生とな

った。この音楽は彼女の教育者としての生涯に大きなプラスとなった。ここを卒業すると、彼女には、英語とピアノの弟子の相手をするだけの、満たされない日々が始まった。

満喜子が十九才の時、広岡家の養子になっていた兄恵三は、それぞれ三、四、五才になる自分の三人の年子の娘の家庭教師兼養育係として彼女を招き、満喜子は広岡家に住み込んで姪たちの教育に当たった。この時の自立生活訓練が、後の幼児教育の実践に助けとなったと彼女は記している。[20]

また、新設の日本女子大学で、半分学生、半分教師のような生活に入り、初めて月給二十円を得たと、満喜子は記しているが、時期や内容等、詳細は明らかではない。

こうして五年が経っても、縁談になると「理想の結婚」「純潔の生活」「社会を清める活動力の単位としての家庭経営」などと彼女が口にするため、話はまとまらず、二十四才も過ぎていった。これは明らかに、父末徳の不道徳に起因する母の不幸と、複雑な家庭環境に生育した満喜子の、結婚に対する潔癖感の為せる業であったと言えよう。

(2) アメリカでの修業

結婚しない満喜子に手をやいた父や兄たち家族は、皆で協議の上、彼女をアメリカに留学させることにした。もしかすれば、留学中の日本人でふさわしい相手が見つかるかと考えたようである。[21]

こうして明治四二年(一九〇九)七月、帰国するクレメント宣教師夫人 Mrs. E. W. Clement の監督の下に、満喜子は渡米した。それ以後約九年に及ぶアメリカ生活が、満喜子の生涯と教育観に及ぼした影響には計り知れないものがある。

クレメント夫人は満喜子を、同船のオアフカレッジ学長夫妻に紹介し、夫妻らは相談の結果、彼女に最も適した所

として、東部の名門女子大学ブリンモアカレッジの予備学校に入るよう薦めた。満喜子はこれを神の導きと信じて従うことにした。

満喜子の在米中の生活について、詳しいことは明らかではない。しかし彼女がソフィとアビゲイル、カーク Misses Sophie and Abigail Kirke によってペンシルヴァニアのブリンモアで経営されていた優れた予備学校に入学したこと、翌一九一〇年一二月四日、ブリンモア長老派教会でジョンストン牧師 Reverend Dr. G. A. Johnston から洗礼を受けたことが判明している。長老派の教会員であった母の影響もあったかと考えられるが、奇しくもヴォーリズとも同じ長老派に属する教会で受洗したことには摂理的なものが感じられる。しかしこの時、満喜子は自分は如何なる特別の信条 creed も信じない、ただキリスト者として洗礼を受けるのですと述べて牧師を驚かせた。(22)

ブリンモアカレッジ Bryn Mawr College は、一八八五年、フィラデルフィア郊外に、クエーカー派によって設立され、いわゆるセヴンシスターズ The Seven Sisters の名門女子大学中では最も新しいカレッジと言われている。「個人の無限の向上」「自己犠牲的奉仕の精神」を目指すが、特に宗教性は強くない。後に出てくる津田梅子や河井道らも学んだことでわが国でも知られている。(23)

満喜子は予備学校在学中、十四才の小児麻痺の女の子の面倒を見る苦しい体験を通して、人間の無限の可能性について知見を得たが、これが後に聾唖者の教育に当たる契機となったと考えられる。

一柳満喜子は、優れた日本の女性に教育を提供する、フィラデルフィアのある婦人グループから豊かな奨学金を与えられて、ブリンモアカレッジ一九一六年度卒業予定生として大学に入学した。彼女は大変優れた成績で一年生を終えたが、二回生に進んで間もなく、腸チフスに罹り、三ヶ月ほど入院しなければならなかった。満喜子はこの時、米

国の優れた看護法と看護婦の社会的地位の高さに驚いたと述べている。後に、彼女が幼稚園で常に子供の保健衛生を重視したことに、この経験が生かされている。

満喜子は退院後も体調が優れず、大学でも教室に出るより医務室にいる方が多かった。そこで彼女は、この状態で奨学金を受けるのはフェアではないと考えて、それを辞退することにしたのである。しかし今後どうすべきか、どこへ行くべきか、米国でどうやって身を立てていけるのか、と思い悩んだ。だが、あの「帯」のように縛られる日本の華族社会に戻るつもりはなかった。[24] そこで満喜子は、女高師付属高女の時、英語を学んだミスベイコンを思い出し、彼女を訪ねた。

アリスベイコン Alice Mabel Bacon（一八五八―一九一八）は、ニューヘイヴン組合教会センターで牧師を四十年間も勤め、エール大学教授でもあったレオナルドベイコン Leonard Bacon（一八〇二―一八八一）の末娘で、家庭の事情から独学でハーバード大学の検定試験を取り、ハンプトン師範学校の教師となった教育者である。奴隷廃止論者の父の影響で、黒人の教育に生涯を捧げた実行力のある女性であった。ベイコンは、父レオナルドが、森有礼弁務公使の依頼で、一八七二年から里親として育てた、日本最初の女子留学生の一人、山川捨松（一八六〇―一九一九）と二つ違いの親友になった。その後、捨松や津田梅子（一八六四―一九二九）らの招きで、一八八八年（明治二一）に初めて来日し、華族女学校等で教えて約一年余り滞在したが、一九〇〇年（明治三三）再来日して、梅子の女子英学塾の設立を応援し、教師を勤めた。[25] この期間に女高師付属女学校でも教え、その生徒の中に一柳満喜子がいたのである。[26] ベーコンが、一柳満喜子という生徒を、その「長ったらしい名前」“with a mile-long name, Hitotsuyanagi”の故に、おぼろげにも記憶していて呉れたことは、満喜子にとって幸いであったと言うほかはない。

「私の所へきて娘におなりなさい」「強く健康になり、そして休息を―それから私のニューハンプシャーのサマーキャンプを助けて欲しい。」……満喜子の話を聞いたベイコンは、満喜子を受入れ、包み込み、自分の娘としてデイープヘイヴン Deep Haven の自宅に住まわせた。満喜子はその時、懐中に数ドルしか持たない身であったが、愛において豊かとなり、初めて真のホーム（家庭）を知ったと述懐している。九才で母に死別して以来、約二十年に及ぶ長く孤独な生活は、ここにようやく愛と安息の場所を見出したのである。[27]

こうして満喜子は、ベイコンの勧めもあり、まだ健康が不振で、ただ講義を聴くだけの学問や十才も年令の違う学友たちとの生活への物足りなさなどから、大学を退学してベーコンの教育事業を手伝うことになった。

満喜子はベイコンとの生活で、多くのことを学んだ。特に人種を超えてすべての人が平等の立場で参加するニューハンプシャーの夏季キャンプで、ベイコンのもとで働いた楽しい日々は、満喜子の生涯忘れ得ぬ体験であった。人間の平等、自由で規律ある生活、労働の意義、民主的な社会の形成、など当時のアメリカ社会が持っていたエトスを、満喜子は次第に身につけていった。また女性の尊厳、奉仕、信頼、愛はキリストの教えに発することを知り、障害者への人道的処遇などにその具体的な姿を体験したことは、後のキリストを中心とし、模範とする教育への第一歩となったのである。

(3) ヴォーリズとの結婚

渡米後約九年が経った、大正六年（一九一七）のある日、満喜子の許に一柳家から久し振りの送金と共に「父上老衰につき帰国せよ」との手紙が届いた。

満喜子は、今では父よりもむしろベイコンの健康が心配だったが、「親は二人といない、ぜひ帰国しなさい」とベイコンに勧められ、再会を約して帰国した。だが、それがベイコンとの最後の別れになったのである。

しかし日本では、それに代わるべき一つの出会いが彼女を待っていた。その頃、広岡家の建築をめぐって、建築家ヴォーリズが呼ばれ、相談が進められていたが、帰国した満喜子は、通訳を兼ねてその相談に加わることになり、二人の交流が始まった。ヴォーリズは、満喜子を建築上の調停役として、自分の考えをよく理解してくれる、実に立派な婦人だと思い、彼女に魅かれていったが、満喜子の肉親たちはその婚約には猛反対であった。華族の娘が外国人と結婚するなど許されなかったからであり、満喜子も一旦はこれを解消しようと思ったようである。しかし兄恵三の義母広岡浅子は、クリスチャンの実業家としてヴォーリズとも友人であり、これを応援した。

大正七年（一九一八）になると、ベイコンから近く大手術をするので、側に来て色々助けて欲しいとの手紙が、満喜子の許に届いた。彼女は恩人の依頼に応えて、恐らくその年の四月には渡米している。当時、結婚反対の渦中にあったヴォーリズが、横浜まで満喜子を見送りに出かけているところを見ると、この時すでに、二人の間では結婚の約束ができていたものと思われる。[28]

しかし満喜子がサンフランシスコに到着した時、出迎えた友人から、ベイコンの手術が失敗し、その五日前にベイコンが死去したことを知らされた。ベイコンの死は、一九一八年五月一日とされているが、一八日ともあり決めがたい。[29] いずれにせよ満喜子の米国到着五日前に死去したことから、満喜子の渡米は四月中であったのは確かである。彼女は悲しみの裡にそのまま東部へ向かい、恩師ベイコンの遺言に従って、数ケ月を費やして遺産の処理等の残務整理を済ませて帰国した。

ここで、その年、ベイコンが亡くなる三月ほど前、大山（山川）捨松がベイコンへ宛てた最後の手紙に、興味深い

記事があるので紹介して置きたい。捨松は明治一五年（一八八二）一一月に津田梅子と共に帰国後、さらに大山巌と結婚後も、ベイコンと文通を重ね、ことあるごとに相談や近況をこまめに知らせていたのである。[30]

「親愛なるアリス

先日、梅のところで一柳さんにお会いして、あなたからのお手紙を受け取りました。

一柳さんとお目にかかり、ベーコン家の皆様の近況を聞くことができました。近い内に彼女ともう一度お会いしてもっと詳しく皆さんのことを聞こうとおもいます。……

一柳さんは素晴らしい女性で、しかも有能な方という印象を受けました。私達は彼女が日本に帰ってきた時には、梅の仕事を受け継いでくれたらと願っています。

アリス、梅の病気のことはご存知だと思います。梅はもう以前のように仕事をすることは無理だと思います。梅の代わりが出来るような人、少なくとも私達が頼みたいような人はまだみつかっていません。私の考えでは、一柳さんはまさに適任者だと思います。彼女が日本で受けた教育は、梅よりレベルが高いので、梅よりも優れた仕事ができるのではないでしょうか。どうかあなたからも彼女を説得してみて下さい。あなたも一緒に日本へきて、彼女を助けて仕事をすることはできないでしょうか……

（以下略）

一九一八年二月一七日　　変わらぬ愛をこめて　捨松より」

（久野明子「鹿鳴館の貴婦人　大山捨松」）

これは、津田梅子の健康が優れず、彼女が創立した女子英学塾の後継者探しに悩んでいた同塾顧問の捨松が、親友のベイコンに相談をかけている手紙であるが、本稿にとって幾つかの疑問がある。その一つは、捨松が満喜子に会ったという「先日」とはいつのことかという問題である。それは満喜子が、帰国した大正六年（一九一七）から、ベイコンの要請に応じて再渡米する大正七年（一九一八）四月頃までの間で、少なくとも二月一七日以前ということになる。そこで「彼女が日本へ帰ってきた時には」という言葉の意味が、謎として問われてくる。この手紙が書かれた二月には、既に満喜子は日本にいた筈だからである。あるいは、捨松が満喜子の再渡米を予期して、そう言ったとも考

えられるが、少くとも文面からは、ベイコンの手術のことを、従って満喜子の再渡米の予定のことも未だ知っていたとは思えない。それどころか、ベイコンにまた日本へ来て助けて欲しいと書いているからである。

津田梅子は大正六年頃から糖尿病で体調を崩し、翌大正七年一月には少し回復したが、捨松は梅子の後継者について考えはじめた。そこで上記の手紙が書かれた訳である。梅子は大正八年（一九一九）一月塾長を辞任、二月に辻マツの塾長代理就任式が行われた。一方、満喜子がベイコンの遺産処理を終えて帰国したのは、大正七年の秋以降であると考えられ、そこで梅子の後継者の話が出されたとしても、彼女は既にヴォーリズとの結婚を期していたから、その話は断り、後継者の件は成らなかったのである。

ヴォーリズと一柳満喜子の結婚は、満喜子が華族の籍を脱し、新たに分家して平民戸主となることによって宮内省の許可が下り、ようやく現実のものとなった。大正八年六月三日、二人の結婚式はヴォーリズ自身が設計した東京白金の明治学院のチャペルで厳粛に行われ、麻布の広岡邸で盛大な披露宴が行われた。当時の社交界の大ニュースとなったことは、言うまでもない。

軽井沢でハネムーンを終えた夫妻は、近江八幡に戻り、八幡教会でまた御披露目を行った。しかし、当時の封建的な田舎町の人々にとって、満喜子はアメリカ帰りの華族の令嬢というだけで敬遠の対象となり、その明確な関東弁は紋切り口上と取られ、生活習慣の違いと不案内から来る衝撃と孤独は、彼女を苦しめた。その時「汝らわがくびきを負え。わがくびきは易ければなり」との聖書のみことばは、その苦しみを安らぎに導くことを体験した、と満喜子は記している。[31] 当時ヴォーリズの両親はアメリカから日本に移住して息子と同居していたので、満喜子は嫁としての務めも果たさなければならなかった。

(4) 教師としての一柳満喜子と教育観

前記のカーゼルマンの類型によれば、満喜子は「子供志向型」であるが、どちらかと言えば、「権威的態度」で指導に当たるタイプの教師であった。それは早く母を失って、精神的孤独の中に生育した彼女の生い立ちと、アメリカでの苦しい自立体験から来る厳しさによるものであったと思われる。

また人間の共通の弱点である「自己中心」「わがまま」を幼時に克服することが、満喜子の理想とする教育観であり、そのため「自己統制力」の育成を主張し、そうすることによって人間のあらゆる可能性が引き出せると考えて、その教育を実践したのである。[32] この教育観には、自己統制力のなかった父親への反発と、ブリンモアで学んだ人間の無限の可能性や、ベイコンから教えられた「自由と規律」「平等で民主的な社会」「女性の威厳」といった思想が影響していると考えられる。

さらに、満喜子は、ヴォーリズのように、青年教師として年令のあまり違わない生徒達を相手としていたのではなく、しつけ discipline を必要とする幼児教育に、しかもある程度考えの定まった三十半ば過ぎから携わったことが、その指導態度に影響していると言えよう。先述のように、母栄子が自分の苦しみは何も語らず、「敵を愛せよ」との聖書の教えに立って、常に黙って祈っていた姿に、幼い満喜子は深い感化を受けて育った。だから彼女は子供と友達のようになって、わいわい遊んだりするよりは、「自己統制力」においても完全であったイエスを模範として、静かに祈りながら子供と共にその跡に従って行く教育を目指したのである。

後年、満喜子は学園長として聖書を教え、この教育を指し示したが、一方、彼女は終生現場の教師でもあった。八十五才の高齢で子供たちに英語と音楽を教え、死の前夜も自宅で生徒の英語のノートの点検を行っていたという。

三　「近江ミッション」教育事業の形成と展開

(1)　賀川の指摘とヴォーリズの教育的ビジョン

大正一二年（一九二三）に出版された吉田悦蔵の「近江の兄弟」の序文の中で、賀川豊彦は次のように述べている。[33]

「ヴォーリズのミッションで、一番の欠点は、教育事業のないことである。……彼が近江を教化しようと思えば、どうしても宗教教育を基調にしなければならぬ。彼の今日あるは、全く彼の聖書研究会の会員が成長したからである。それで、彼がもし彼の理想をつぎこんだ中等学校なり、工業学校……聖書学校なりを建てなければ、彼の事業は半分しかできあがっておらないと、わたしはおもう。」（「近江の兄弟」一九二三）

これは、ヴォーリズと近江ミッションの発展の経緯をよく知る賀川なればこその、まことに適切な指摘であると言える。前に見てきた通り、近江ミッションは彼のバイブルクラスから始まり、それを母胎にしてＹＭＣＡが結成されて会館が建ち、卒業生たちが参加して形成されたものだからである。つまりヴォーリズのＹＭＣＡ運動の理想を理解し、それに共鳴した教え子たちが協力して出来てきたものであり、そこにヴォーリズの教育者としての優れた資質を見ることが出来る。しかしミッション形成に忙しかった彼にはまだ学校をつくる余裕はなく、キリスト教教育についての一定の理念を心に描いているに過ぎなかった。例えば“A Mustard Seed in Japan”の中で、ヴォーリズは近江ミッションの教育事業について、次のように記している。[34]（拙訳）

「たしかに近江ミッションは、直接的な教育事業を始めるのにゆっくりしていた。この遅れに対しては、幾つかの

理由が挙げられる。他のミッションは大抵、学校を持っているし、日本政府には、就学率の統計を見る限り、どの国より包括的な学校システムがある。それ故、我々は自分たちの領域や役割として、福音的、社会的なことに一層の召命を感じて来たのである。

しかし働き人への訓練なくして、如何なる宗教事業も完全で永久的な成功を望むことは出来ない。そこで、近年我々には、……クリスチャンの働き人を訓練し、現在のステレオタイプのシステムでは生み出せない、信徒の指導力の発達への要請にふさわしい、新しいタイプの学校システムを企てるべきだという考えが成長して来たのである。我々は目下、次の二十年間に、日本の教育において、たとい小規模でも、わがサナトリアムが、現在結核の治療にあって成しつつある新しい基準と同じような、新しい学校システムのモデルをつくるビジョンを見ている……」（A Mustard Seed in Japan）

ここに見られるヴォーリズの教育的ビジョンは、学校というよりは、やはりミッションの維持発展のための、なにかユニークな教育機関の設立であって、彼のモチーフであった創造と「実験」的色彩の濃いものであったと言えよう。いずれにせよ、その実現には、なお多くの時間と夫人満喜子の協力に俟たなければならなかった。

（2）清友園幼稚園と満喜子の教育的ビジョン

さて、ヴォーリズ夫人満喜子は、土地の人々が考えたような、単なる華族の令嬢ではなかった。幼い時からの、そしてアメリカでの苦労、ベイコンの許での訓練によって鍛えられて来た彼女は、しゅうとに仕えて自ら家庭を切り盛りし、何事にも率先して働き、積極的に行動する婦人であった。人々も次第に彼女を信頼し、相談に訪れるようになった。

結婚の翌年、大正九年（一九二〇）に、早くも満喜子は、ポリポリおやつを食べながら為すこともなく軒下にたたずむ街の子供たちを見て、彼らに建設的な遊び場をつくることを考え、ミッションの空き地を利用して、プレイグラウンドの仕事を始めた。今日の学童保育の先駆であった。その費用は自分の小遣いや持ち物を売ってまかなった。有志の社員の手伝いも受けたが、雑誌部、英語部、料理部といった名前からその活動内容が窺われる。このプレイグラウンドは「清友園」と名付けられた。

そのうち放課後の児童だけでなく、定期的にもっと長時間の保育をとの願いから、幼稚園を始めることになった。「教育随想」によれば、当初ミッションの常任委員会は、金銭を要することはしないという決議であったというが、これは金銭の問題ではなく、キリスト教教育をするのだという満喜子の信念が通ったようである。[35] だがそこには既に教育と経営の論理の対立の萌芽が感じられ、この対立は後まで尾を引くことになるが、それについては後述する。

大正一一年（一九二二）六月三〇日に県に提出していた「清友園幼稚園」設置許可願いは、同年八月二三日に許可され、九月一四日、池田町の旧家屋を改造した園舎に四名の園児を迎えて開園式が行われた。清友園プレイグラウンドの幼稚園ということで、「清友園幼稚園」と称した。これが近江ミッションの教育事業の始まりである。[36]

満喜子はこうして、近江ミッションにおいて自分の役割を見いだしたが、昭和四年（一九二九）、幼児教育を中心とした教育の専門的研究のために三度目の渡米をする。ベイコンの遺産による自費視察留学であった。彼女は、ニューヨークの National Child Health Association, National Heigine Association, ワシントンの Child Research Center, エール大学ギゼル博士の教育実験所等を訪問視察した。またコロンビア大学に籍を置いて夏期大学を受講し、同大学付属のジョンデューイ博士教育法の実験学校である Lincoln School, Horaceman School を視察見学した。この他盲人教育の Perkins Institute, 黒人教育の Hampton Institute, デトロイトの Nursery School, そして

Merrill Parmer School 等、実に精力的に研修を重ねた。彼女のアメリカの友人の世話で、ボストンのフィーラックスクールで幼児教育の留学を終えた浪川かつもこの視察に同行し、共に帰国した。浪川は以後満喜子を助けて清友園幼稚園に生涯を捧げるのである。

満喜子はこの研修について、宗教教育以外のすべてがあったと、感想を述べている。[37] 彼女はデューイの教育にかなりの影響を受けたとは言え、キリスト教教育は揺らいではいなかった。満喜子の教育観は、これまで見て来たように、生い立ち、ブリンモア、ベイコンらによって形成され、この視察留学によって仕上がったと考えられよう。

満喜子のこの渡米は、近江ミッションにも大きな賜物をもたらした。ヴォーリズと以前から交流を持ち、メンソレータムの販売権や伝道船「ガリラヤ丸」の寄付によって、近江ミッションを支援してくれた、クリスチャン実業家のハイド Albert Alexander Hyde（一八四八？―一九三五）とその夫人は、満喜子が渡米中に訪問した際、彼女の幼稚園の話を聞き、後に夫人は自分の貯金全部と子息たちの分を加えた合計三万ドルを、「満喜の仕事へ」として送金してきたのである。当時これは巨額の寄付であり、近江ミッションでは八幡町郊外の市井町に広大な土地を購入し、昭和六年（一九三一）最新式の施設と設備を備えた幼稚園舎を建設した。またその体育館を兼ねて建てられた教育会館は、学園教育はもちろん、近江ミッション全体の集会や礼拝、クリスマス等に使用され、さらに、講演会、音楽会、幻灯や映画会など広く地域の文化向上に用いられて、今日に至っている。[38] ハイドは収入の十分の九までを社会のために捧げたというが、当時のアメリカの実業家のキリスト教精神には敬服するほかはない。

満喜子は、清友園幼稚園の出発に際し、眼前の幼児だけでなく、周囲の成人社会を前にして深く考えた、彼女の幼

児教育思想とビジョンを次のようにのべている。[39]

「政界に、実業界に、芸術界に、宗教界に、その他凡ての方面を通じてその現実を静かに分析して考えてみると、人間共通の弱点がしみじみと見いだされます。これを補いたいと思う心から生まれた人間教育の理想が、この幼稚園の理想となったのであります」「肉体の発育にも、知能の発達にも、長い間の経験と練習を要することは前述しましたが、まして精神の発達には、実に長い間の緻密な練習と経験を要することは申すまでもありません。人生は短く、いかほど長くみても、わずかに七八十年、生まれ落ちたその時、否、胎内にある時、否、その宿るべき胎内の準備される時から、この教育を始めなければ精神の成育を全うすることはできません。「だから、あなた方の天の父が完全であられるように、あなたがたも完全なものとなりなさい」（新共同訳聖書マタイ五：四八）……と宣うたキリストの御言葉を信ずるものは、その全きを仰いで人類の教育の目的とせずにおられません。この教育を如何にしてするかというのが、人類教育のクライマックスであります。……」「近江兄弟社幼稚園の理想」（「教育随想」、一九六六）

これが今日、近江兄弟社学園の建学の精神として表明されている「イエスキリストを模範とする人間教育」の根拠である。ヴォーリズと同様満喜子もまた、小さな教派などに囚われず、聖書に示されたイエスキリストとその精神の中に大きく生きた教育者であったと言えよう。米国留学中に受洗したとき、私は信条（教義）ではなく、ただキリストのものとして洗礼を受ける、と語った彼女の言葉は、今も光彩を放っている。[40]

(3) 「大林子供の家」と「幼児教育専攻部」

昭和一一年(一九三六)一一月、近江ミッション(昭和九年から財団法人近江兄弟社と改称)は滋賀県八幡町の大林という被差別地区に、隣保館を設置し、乳幼児の保護、保健衛生の強化、体育の奨励、青少年教化、職業補導、軍事援助等の事業を計画した。[41] 具体的には医療(健康相談、社会ベッド=結核患者の医療費一部負担、軽費病床、無料診察券)、保育(子供の家=幼児託児所)、教化(プレイグラウンド、夜学校、少女会=子守少女教化、講習会)、矯風(禁酒禁煙、貞潔思想普及)、軍事援助(遺家族訪問、慰安会)、授産(職業補導紹介)等の事業が行われた。当初、地区内の共同浴場の二階で開設、後に市井町の近江ミッションの建物で行われた。清友園幼稚園の出張保育と近江療養院(サナトリアム)のベッドを活用した合理的な事業で、責任者は一柳満喜子が兼任した。経費の七割は財団が負担し、三割は県などの補助があった。

これは、いわゆる融和事業ではなく、近江ミッションの「綱領」に基づく社会奉仕事業であったと言える。

満喜子は自宅を開放して若い娘たちの相談や指導に当たっていたが、昭和一四年(一九三九)三年制の「幼児教育専攻部」(教育研究所)を設立し、清友園幼稚園を実習場として保母の養成を開始した。また園芸、家畜、洋裁等の労作も行った。これが発展すれば、高等教育機関の設立に至る筈であったが、戦時下のため、昭和一八年三月をもって閉鎖されたことが惜しまれる。

満喜子が早くから保母養成の必要を感じていたことは明らかである。「清友園幼稚園の健康生活」(一九三三)の中で、清友園幼稚園の教育を実施するのに困難を感じる一大点は、「指導者たるべき保母達が、未だ知能的にも、精神的にも、生理的にも、理性と情緒の調和せる真の自由の生活の体験を持たず、又之に対する自発的興味をさえもたぬ事であります。」と述べている。[42] これは彼女と若い保母たちとの間のギャップがあり過ぎたからであるが、徒にそ

れを嘆くのではなく、その解決のために、実際保母養成機関を作った所に、満喜子の優れた指導性を見ることが出来る。

(4)「近江勤労女学校」と「近江向上学園」他

これまでヴォーリズ夫人満喜子を中心とする近江ミッションの教育事業形成の跡を見て来た。そこでは主として、満喜子の教育思想に基づく幼児教育と、保育および保育者の育成に力が注がれて来た。

一方、吉田悦蔵は、ヴォーリズとの仕事を通じて、また英語講師などの経験により、以前から教育に関心があり、特に女子従業員の教育については心を痛めていた。昭和七年の暮れ、彼は夜業中のメンソレータム工場の見回りに出かけたが、その時、たまたま同志社女学校から冬休みで帰省していた双子の娘を連れて行った。娘は包装部でガラス瓶を洗っていた友人に出会い、気軽に声をかけた。しかし吉田は、むしろ「向こうで働いている、あの娘さんの方が、(わが娘より)素質もよく、向学の精神も強く、将来のある人材かも知れないのに、毎日八時間、あるいは夜業まで して稼いでいる。不合理ではないか。」と心に期するものがあった。[43] そこで早速、労作を取り入れた勤労女学校を構想し、急ピッチで準備を進め、昭和八年(一九三三)四月四日にはその開校式が行われた。

これは、ドイツのアルバイトシューレにヒントを得たもので、一クラス一六人の小人数で五学年で完成し、学科と労作、給食、清掃など生活を共にする教育共同体のような各種学校の女学校であった。教師は社内の人材でまかない、午前中は学科、午後は教師も参加して、共にメンソレータムの包装の紙折り等の労作、校内その他近隣の清掃、自分たちの衣服縫製、靴磨き、食事つくりなど生活そのものの教育が行われた。もちろんキリスト教教育を基本とし、夏にはキャンプがあり、近江ミッションに来訪する世界や日本の知名人の講演を聞くことも出来、芸術活動も活発に行

われた。生徒たちが、毎日を楽しく喜んで通学したことは、この教育が成功したことを示している。[44]

これはヴォーリズの言う「新しいシステムの学校」に近いものであったかもしれない。そして吉田自身が言うように、世界的学者に啓発されずとも、ヴォーリズと共に長年近江ミッションをやってきた彼の中に、「人格をつくる学校」や「勤労学校」のコンセプトがあったからこそ、こういう構想ができたのであろう。吉田は、勤労学校をつくるために、ケルシェンシュタイナーを始め、デューイ、ナトルプ、小原国芳に至るまでの、にわか勉強を始めたと記しているが、[45]そこにはある種の怖さも否定できない。学校を創める「建学の精神」とはそんな軽いものではないからである。

とにかく学校は始まり、吉田は校長となった。彼が社内一の実力者であったからこそ、かくも短期間に教師スタッフ、施設設備、財政措置、県の認可、社内の了解と協力等を整え得たのであるが、かつて満喜子が古家屋でささやかな幼稚園を始めるとき、当時の常任委員会が、金銭を要することはしないと一旦は決議したことが思い出される。

この学校は、昭和一〇年三月、工場女子従業員教育と間違われるため、近江兄弟社女学校と改称された。さらに戦時中の昭和一八年一二月一四日、「専門学校入学者規程」による、高等女学校卒業者と同等の指定が文部大臣から下り、昭和一九年三月以降の本校卒業者は、念願叶ってようやく一般の高等女学校卒業生と同じ扱いとなったのである。

一方で、吉田が心にかけていた女子従業員教育は、昭和八年五月五日夜、「向上学園」として開園式が行われた。これは「工場」と「向上」をかけて命名されたもので、毎日午後一時間の学科と、土曜日に洋裁、料理、家事、生け花、茶の湯等が教えられた。翌年、工場女子従業員教育と改称したが、昭和一二年、再び向上学園に戻り、戦時下

昭和一九年に、女子青年学校となった。戦後の昭和二三年四月、新制度による「近江兄弟社高等学校」の設立に伴い、その「定時制部」として改組され、特色ある教育を続けたが、昭和五三年三月、最後の卒業生七名をもって四五年の歴史を閉じた。[46]

この他、ヴォーリズも関わっていたＹＭＣＡ英語学校、吉田夫人の近江家政塾、各地の基督教青年会館での日曜学校等も近江ミッションの教育事業として、考えることが出来る。

(5) 近江農民福音学校

近江ミッションの社会教育事業として忘れてはならないのは、昭和初期に県下各地で開かれた農民福音学校である。名前は様々であったが、教育会館や各地の基督教青年会館を使用して、農村青年を募り、約五―七日間、寝食を共にして、将来の農村指導者に研修の機会を提供したのである。[47] 八幡はもちろん、野田、能登川、八日市、信楽、海老江（湖北）、堅田、今津など県下各地での広義の伝道活動の一つとも言えるが、当時盛んであったデンマークの国民高等学校の影響や賀川の農村伝道との連携で開かれる場合もあった。講師として、賀川や代議士の杉山元治郎、京大や同志社の教授、県立農業試験所技師や農学校校長等を迎え、ヴォーリズや吉田をはじめ、近江ミッションの社員も参加してかなり高レベルの講義と、デンマーク体操、人形劇、映画、音楽など多彩なプログラムが行われた。

その一例として、昭和六年三月三日から九日まで一週間に亘って、初めて今津で開かれた第一回今津農民夜学会の様子を紹介する。[48] 主催と会場はもちろん近江ミッションの今津基督教会館、正科生（農業者）四〇、聴講生五、計四五名を募集した。これは夜だけの会であったが、皆出席者は二四名に達した。平均年齢は二二―三才であった。

夜七時、国歌斉唱と礼拝をもって始まり、先ず杉山の「新農村の建設」の講義が行われた。終わって有志がストーブを囲み、一一時まで質疑とあり、その楽しさが窺われる。以下六日間に亘って「農村問題」「副業としての農村工芸」「農業経営」「養鶏の実際」「人間生活の理想」「住宅と保健」等の講義が続いた。その間に歓迎会や懇親会などもあり、当時、近江でも山間僻地と言われた地方の農村青年達には、まことに楽しく有意義な一週間であったと思われる。最終夜には、またストーブを中心に茶菓で送別会を持ち、雑誌発刊の決議をして、一一時に散会した。これを見る時、宮沢賢治の「羅須地人協会」での農民文化活動が思い出される。

この農民福音学校は戦後も県下各地で続けられ、多くの農村指導者を生み出した。[49]

(6) 戦中戦後のヴォーリズ(一柳)夫妻と「近江兄弟社学園」の成立

戦時下の国家総動員体制は、近江ミッションの各部門に大きな変動をもたらしたが、教育事業もその例外ではなかった。ヴォーリズは昭和一六年一月に帰化して日本人一柳米来留となったが、敵性人として監視下におかれ、近江兄弟社自体も同様であった。満喜子の許にも二度に亘って陸軍中将が訪れ、清友園幼稚園の米国流の個性尊重教育は、「道はづれ」(国体に合わない)であると警告した。[50]

このような中で、昭和一七年春から、ヴォーリズは京都帝国大学文学部英文科講師として週一回出講した。しかしこの年から夫妻は、毎年夏の軽井沢滞在を、夏以降も続けることを余儀なくされたようである。一つには夫妻を守るため、一つには近江兄弟社の企業防衛のためと思われる。もちろん八幡との往来は自由であったが、夫妻は八幡を追われたような形で終戦後まで軽井沢に在った。同年五月号の「湖畔の声」は、一柳満喜子園長は「……今回新学園の誕生と共に道を後進に譲り、今後とも指導者の養成に協力下さる事に成ました。」と、表面を繕った表現で満喜子の

戦時「追放」を報じている。[51] しかし彼女の教育への熱意は衰えることなく、軽井沢教会の幼稚園に乞われて園長となり、疎開していた東京の啓明学園の教育も顧問として助けることになる。さらに終戦後疎開したままの住人の子女の教育にも取り組んでいる。

ヴォーリズが東京帝国大学文学部講師として軽井沢から週一度出講したのは、この年の一〇月からであるが、健康を損ね翌年初秋前には辞任している。そして昭和二〇年九月始め、近衛公の使いでGHQへ赴くことになるが、そのことは本稿では触れない。[52]

八幡では近江兄弟社女学校生徒が農繁期託児所や一四の寺院の託児所に動員され、昭和一九年からは工場動員もはじまったが、これらは当時では普通のことであった。清友園幼稚園は、昭和二〇年三月には保育停止となり、四月からは戦時保育所として、幼児部と乳児部に分けられた。教育会館は軍の糧秣倉庫に使用されて荒れ、近江療養院も大阪第二陸軍病院に接収された。

戦後の昭和二〇年一一月、ヴォーリズ夫妻は彼の母親を伴って軽井沢から帰幡し、一二月二四日には近江ミッション（兄弟社）の復興へ向けての全体会議が開かれた。一柳満喜子は常任委員会で、晴れて近江兄弟社教育事業の全責任を委任され、昭和二一年、女学校長、女子青年学校長に就任、対外的にも、一二月から昭和二三年まで、滋賀県教育委員会委員に選ばれてその任を果たした。

昭和二二年（一九四七）四月、新たに近江兄弟社小学校、同中学校を開設、それぞれ第一学年各三〇名を募集し、一柳満喜子が幼稚園長、小、中学校長に就任した。占領軍の滋賀県軍政部は民主的な満喜子の教育方針を支援し、県

下の公立校教員の教育研修や資格講習会等が、学園の主催で行われた。今や近江ミッションの教育は、一般の戦後教育をリードする立場に立ったのである。[35]

昭和二三年三月、中学校に編入していた近江兄弟社女学校の生徒は、中学第一回生として卒業し、女学校は自然消滅することになった。昭和二三年（一九四八）四月、新制近江兄弟社高等学校（全日制男女共学）が創設された。これに伴い、女子青年学校を閉鎖して近江兄弟社高等学校定時制部（女子、五年制）を開設したことは前述した。一柳満喜子は高校校長となった。昭和二四年には近江ミッション以来のＯＭＩをデザインした校章を制定、翌二五年には中高校舎第一期工事を完成、そして昭和二六年（一九五一）三月、幼小中高の各校園を統合するため、「キリストの真精神を指導原理として人格の完成をめざし、心身共に健康な社会人の育成を期して」学校法人近江兄弟社学園が設立された。一柳満喜子は正式の初代学園長となり、一柳米来留（ヴォーリズ）が初代理事長に就任した。ここにようやく現在の形の学園が形成されたのである。

四　近江ミッション（近江兄弟社学園）教育の目的と理想

（1）「イエスキリストを模範とする人間教育」

一柳満喜子は、この学園の建学の精神について、次のように記している。[34]

「キリストが身をもって示された教育思想及び方法に及ぶものとてはなく、私の夢見ている教育は、まだ何処にも行われていない事を知りました。そしてそれ自体がキリストによって生まれ、育まれて来た兄弟社内こそキリストに絶対従順の教育を試みる場所であることを自覚して、……わが学園において一貫してこれの実践に専心進みたいと願うたのであります。」

「天父への絶対服従、天父の愛への絶対信頼、弟子たちへの限りない忍耐、パリサイ人に対する寛容と忍耐、真理の樹立など福音書にあらわれたキリストの御姿は、目に見えるように明らかであります。

このような模範を日々の聖書課程に読む特権を持つ私たちクリスチャンが、どうしてこれ以下の指導書の難しい語句に迷わされてつまづく事があり得べきでしょうか。

天父に従順なキリストにして、人間的なテストに失敗されたことは一つもありません。最後に天父の命令とわかって自らあえて進みよられた十字架は、失敗どころか大勝利でありました。〝人その友のために生命を捨つる、これより大いなる愛はなし〟と愛の究極の実践者を模範に、益々精進したいとこそ願うのであります。」

「たどり来し道をふり返りて」（「教育随想」一九六六年版）

ここには、満喜子が何故「イエスキリストを模範とする教育」を学園教育の精神とし、目的としたかが、明らかにされている。

(2) 学園校歌

満喜子はかつて筆者に、イエスの「積極的思考」positive thinkingを賞揚し、「……してはいけない」といった「否定的思考」negative thinkingの多いパウロの考え方は採るところではないと語ったことがある。それはたとい神学的には問題があったとしても、人間教育としては正しい見解である。教理にとらわれて、生命力を失っているキリスト教ではなく、生きて働くイエス自身を模範とするのが学園のキリスト教教育だ、とする満喜子の教育思想は、イエスと共に永遠であると言える。

昭和二二年（一九四七）、ヴォーリズは学園校歌を作詞し、満喜子が日本語に訳出した。ここには、イエスキリストの生き方に学び、これを模範として、師弟共に、永遠の真理を求めていこうとする満喜子の、そして学園教育の目的と理想が、ヴォーリズの詩によって明確に謳われている。[65] そのイエスの姿は、ヴォーリズが育ったＹＭＣＡの教育

思想が説くように、霊（Spirit、Soul）、知（Mind）、体（Body）の調和のある人間像そのものであり、この部分にはそれを目指すヴォーリズ自身の教育観が盛り込まれている。

この校歌に謳われた教育の目的と理想は、夫妻の見事な共同作品であり、夫妻それぞれの教育思想が、近江ミッションの種々の教育事業で試され、様々な試練を経てこのようなかたちで結実を見たと言うことが出来よう。

しかし理想が高ければ高いほど、現実とのギャップも大きく、苦悩も深くなる。特に教育の理想と経営の問題、非キリスト教的思想の挑戦等は、長年、学園を苦しめて来た。ヴォーリズが晩年、神に十分に従い得なかった自分を顧み、「失敗者」と自覚したように、満喜子もまた、晩年に至って、神から預託された教育事業を果たし得なかったことを詫び、神にゆるしを願っている。[56] この教育を継承する者は、まずこの創立者夫妻の敬虔さと謙虚さに学ぶことから始めなければならないであろう。

School Song（近江兄弟社学園校歌）

作詩　W. M. Vories. 訳詩　一柳満喜子、曲　R. Schumann

1. Here, in the springtime of our youth,
Let us pursue Eternal Truth;
The Life of Peace and Brotherhood,
In Love of neighbors and of God.

1、われら若き日に
わけゆく正道
神と人との愛
平和と協力

2. Here, let us train our hands and hearts,
In beautiful and useful arts:
Christ, as our model and our goal,
True Health of Body, Mind and Soul.

2、全き人イエスの
御跡をふみつつ
美と能力との業
身とたまとを磨かん

注

(1) 「W・M・ヴォーリズの思想構造」(同志社大学人文科学研究所『キリスト教社会問題研究』三〇号、一九八二)、「W・M・ヴォーリズの経済思想」(同上、三一号、一九八三)、「W・M・ヴォーリズの商業学校教師時代」(同上、三三号、一九八五)、「近江ミッション共同納骨塔事件」(同上、三五号、一九八七)、「第二次大戦期のW・M・ヴォーリズ」(同上、三七号、一九八九、及び共著として『近代日本社会とキリスト教』、同朋舎、一九八九にも所収)、「近江ミッションとガリラヤ丸伝道」(同上、三八号、一九九〇)、「信仰詩人ヴォーリズ」(キリスト教文学会関西支部『キリスト教文芸』八号、一九九一)、「主要キリスト者と天皇制=ヴォーリズ」(同志社大学人文科学研究所編『近代天皇制とキリスト教』人文書院、一九九六所収)等が直接ヴォーリズと近江ミッションに関する拙稿論文であり、それらを含む近代日本におけるキリスト教を扱った拙稿論文として、「近代日本におけるキリスト教受容と変容」(早稲田大学社会科学研究所『社会科学討究』、一〇二号、一九八九)がある。

(2) G. N. Fletcher: "THE BRIDGE OF LOVE", E. P. DUTTON & CO., INC. NEW YORK, 1967)

(3) 前掲、拙稿「W・M・ヴォーリズの商業学校教師時代」

(4) K・マンハイム「知識社会学」(「現代社会学大系八青木書店、一九七三)にある「存在の被拘束性」Seinsverbundenheit の概念は、これらの場合にも適用される。

(5) 一柳米来留「失敗者の自叙伝」(近江兄弟社湖声社、一九七〇、一九八〇再刊)、九頁。

(6) 一柳、同上書、一九頁。

(7) 「私はキリスト教をこう考える」(「湖畔の声」二六五号、一九三五)、四—五頁。

(8) 一柳、前掲書、二〇頁。

(9) The Junior Class of Colorado College: "The Pike's Peak Nugget", Vol. 3, pp. 90-91.
(10) "The Pike's Peak Nugget", Vol. 5, p. 97.
(11) ヴォーリズの召命については、「失敗者の自叙伝」(前掲)、六六—七三頁。拙著「近江に神の国を—W・メレルヴォーリズ」(近江兄弟社湖声社、一九八六)、一六—二〇頁を参照。第四回SVM大会については、浜田清夫「W・M・ヴォーリズとS・V・M・トロント大会」(同志社大学アメリカ研究所『同志社アメリカ研究』、一二号、一九七六)に詳述されている。
(12) 滋賀県県立商業学校、および同校教師時代のヴォーリズの動きについては、拙稿「W・M・ヴォーリズの商業学校教師時代」(前掲)に詳述してある。
(13) 吉田悦蔵「近江の兄弟」(近江兄弟社、一九六九年版)、七〇頁。沖野岩三郎「吉田悦蔵伝」(近江兄弟社、一九四四)、八一—八二頁。
(14) 沖野、同上書、八二—八四頁、拙著「近江に神の国を」(前掲)、二八—三〇頁。W. MERRELL VORIES: "AMUSTARD-SEED IN JAPAN", (1911), pp. 38-39.
(15) 拙稿「近代日本におけるキリスト教受容と変容」(前掲)に詳説してある。
(16) C・カーゼルマン「教師のタイプ」(早稲田大学出版部、一九八一)、五一頁以下。
(17) 藤代肇「春の遺跡」(昭和出版、一九八一)、一三九頁。
(18) 一柳満喜子「辿りきし道をふりかえりて」(『教育随想』、近江兄弟社学園、第二増訂版、一九六六)、一—三頁。
(19) G. N. Fletcher: "THE BRIDGE OF LOVE", pp. 21-24.
(20) Fletcher: op. cit., pp. 40-41.
(21) Fletcher: ibid.
(22) Fletcher: op. cit., p. 43.
(23) 佐野安仁「一柳満喜子の教育観」(前掲)、三六五頁。
(24) Fletcher: op. cit., p. 45-46.
(25) 久野明子「鹿鳴館の貴婦人大山捨松」(中央公論社、一九八八)、八一頁以下。
(26) Fletcher: op. cit., p. 46.

(27) Fletcher: op. cit., pp. 46-47.
(28) 一柳「失敗者の自叙伝」(前掲)二七四—二七六頁。一柳満喜子『教育随想』(前掲)九—一〇頁。
(29) 久野、前掲書、三〇四頁。年表には五月一日とあるが、「日本キリスト教大事典」(教文館、一九八八)、一二六〇頁「ベーコン」の項の死去年月日には、一九一八・五・一八となっている。
(30) 久野、前掲書、二八二—二八三頁。
(31) 一柳満喜子、前掲書、一〇—一一頁。
(32) 一柳満喜子、「近江兄弟社幼稚園の理想」(『教育随想』、一九六六)、二五—二六頁。
(33) 吉田悦蔵「近江の兄弟」(前掲)、九頁。
(34) M. V. H. with Notes by Yasuzo Shimizu: "A MUSTARD SEED IN JAPAN", (THE HOKUSEIDO PRESS, 1971) p. 51.
(35) 一柳満喜子、前掲書、一一—一二頁。
(36) 「教育のこころみ—近江兄弟社学園五〇年小史」(近江兄弟社学園、一九七二)一八七—一八八頁。
(37) 一柳満喜子、前掲書、一四頁及び一九—二〇頁。
(38) 一柳満喜子、同上書、一五—一六頁、A・A・ハイドについては、「湖畔の声」(二六八号、一九三五)、一六—一七頁参照。
(39) 一柳満喜子「近江兄弟社幼稚園の理想」(『教育随想』(前掲))、二二頁、二六—二七頁。
(40) 本稿、注(22)。Fletcher: op. cit. p. 42, "being baptized a Christian."
(41) 「教育のこころみ」(前掲)、一八九—一九〇頁、拙稿発表資料「大林子供の家」(第四二回日本教育社会学会、筑波大学、一九九〇)。
(42) 一柳満喜子「清友園幼稚園の健康生活」(「湖畔の声」二四二号、一九三三)、二六—二七頁。
(43) 吉田悦蔵「近江勤労女学校を作る考え」(「湖畔の声」二四二号、一九三三)一七頁。
(44) 「教育のこころみ」(前掲)、一九〇—一九二頁。
(45) 吉田、前掲稿、(「湖畔の声」二四二号、一九三三)、一八—一九頁。
(46) 「教育のこころみ」(前掲)、一九二頁および、拙著「近江兄弟社高等学校定時制部四五年史」(近江兄弟社学園、一九七

八)、一六頁以下。近江向上学園から定時制部閉校までのの歴史を詳述している。

(47) 「近況録」(「湖畔の声」二二八号、一九三二)、四三―四五頁。

(48) 「今津農民夜学会報告」(「湖畔の声」二一九号、一九三一)、三八―四〇頁。

(49) 「近況録」(「湖畔の声」四二九号、一九五一)、三〇頁。

(50) 一柳満喜子「辿り来し道をふりかえりて」(前掲)、一八頁。

(51) 「近況録」(「湖畔の声」三五一号、一九四二)、二三頁。

(52) 拙稿論文「ヴォーリズ―主要キリスト者における天皇制」(共著『近代天皇制とキリスト教』同志社大学人文科学研究所編、人文書院、一九九六)三八三―四〇〇頁は、この問題を整理、詳述したものである。

(53) 「教育のこころみ」(前掲)、二〇七頁、戦後、教育の指針を失った県や公立諸学校は、当時、既に憲法と教育基本法の理想を先取りして、キリスト教精神による人権尊重と民主主義教育を唱え、実践していた学園教育に学ぶほかなかった。一柳満喜子「校歌と愛校精神」(「近江兄弟社学園新聞」一九五八、六、「教育のこころみ」(前掲)一二四―一二五頁所収)には、その頃の状況が説明されている。

(54) 一柳満喜子「辿り来し道をふるかえりて」(前掲)、二〇―二一頁。

(55) 一柳満喜子「校歌と愛校精神」(「教育のこころみ」(前掲))、一二四―一二五頁。

(56) 一柳満喜子「昭和四十二年三月十日記」(「教育のこころみ」(前掲)一七四頁。